

キリストと一つになっているなら

ローマ人への手紙 6章 1-14節

はじめに

今日は、使徒パウロの言葉から「自由」について学びたいと思います。

パウロは1節で、「**私たちは罪にとどまるべきでしょうか**」と語っています。イエスを神の子、救い主と信じるクリスチャンは、すべての罪が赦されます。イエスを信じるすべての人の罪を、イエスが十字架で償ってくださったからです。またイエスを信じるすべての人の代わりに、イエスが完全に神様に従ってくださったからです。

しかしそうすると、いつの時代でもこのように言う人が現れます。「すべての罪が赦されるなら、どんなに罪を犯してもいいじゃないか」。イエスを信じてクリスチャンになっても、完全に罪を犯さなくなるわけではありません。私たちは生涯の最後まで、罪の性質を完全に拭うことはできません。

ではもう一度、聖書が語る「罪」とは何かを思い出してみましょう。聖書が語る「罪」とは、神様の律法に従わないことです。神様の律法は、「十戒」の中に要約して書かれています。その中心は「神様を愛し、隣人を愛すること」です。その意味で、神様を愛さないこと、隣人を愛さないことこそが、聖書が語る「罪」なのです。では、神様を愛さず、隣人を愛さない人は一体誰を愛しているのでしょうか。それは、「自分自身」です。神様を愛さず、隣人も愛さず、ただ自分だけを愛して生きること、つまり「自己中心に生きること」、それこそが「罪の本質」なのです。

パウロは今日の聖書箇所の問題にしていることは、イエスを信じてクリスチャンになった人は、すべてが赦されるからと言って、神様も愛さず、隣人も愛さず、自己中心に生き続けてよいのかということなのです。

「自由」との関わりで言えば、イエスを信じてクリスチャンとなった人に与えられる「自由」とは、すべての罪が赦されるから、自分のやりたいこと、好きなことをして生きるということなのかということなのです。

1. キリストと一つに結ばれる

2節でパウロは、その問題についてはっきりとこう言います。「**決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしてなおも罪のうちに生きていられるでしょうか**」。パウロは、イエスを信じてクリスチャンとなった人は、罪に対して死んでいるので、罪の中に生き続けることなどできないと言うのです。

私たちは、イエスを信じた時、私たちが自覚するしないに関わらず、「罪に対して死

ぬ」ということが起こったのです。3-5 節でパウロはこう言っています。「**それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。私たちがキリストの死と同じようになり、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです**」。

私たちは、イエス様を信じた時、イエス様と一つに結ばれます。そしてイエス様が十字架で死なれたように、私たちもイエス様と共に葬られます。さらに私たちは、イエス様が神様の力によって死からよみがえったように、私たちもイエス様と共に新しいいのちによみがえります。この「新しいいのち」こそ、「永遠のいのち」です。ですから私たちは、イエス様を信じた時から「永遠のいのち」に生かされているのです。

そのことを目に見える「しるし」として表しているのが「バプテスマ」、つまり「洗礼」なのです。「洗礼」は、私たちがイエス様と一つに結ばれ、イエス様と共に死に、イエス様と共に新しいいのちによみがえったことを表す「しるし」なのです。私たち長老教会では、通常「滴礼」、つまり頭に水をかける仕方で洗礼を授けますが、バプテスト教会などでは、「浸礼」、つまり身体全体を水に浸す仕方で洗礼を授けます。「浸礼」では、身体を水に沈める時にイエス様と共に死んだことを表し、水から起こされる時にイエス様と共に新しいいのちによみがえったことを表します。

「滴礼」であれ「浸礼」であれ、イエス様を信じて洗礼を受けた人は誰でも、イエス様と一つに結ばれ、イエス様と共に死に、イエス様と共に新しいいのちによみがえったこと、つまり「永遠のいのち」に生かされていることを知らなければなりません。

2. 罪の奴隷からの解放と自由

パウロは6-7 節で、「罪に対して死ぬ」ということについて、もう少し詳しく語ります。「**私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。死んだ者は、罪から解放されているのです**」。

私たちすべての人間は、生まれながらに「**罪の奴隷**」であると聖書は教えています。アダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食べた時から、すべての人間は罪の性質を持ち、「罪の奴隷」として生まれてくるのです。「奴隷」は、主人に絶対的に服従します。「罪の奴隷」の主人は、「罪」です。「罪」とは、神様を愛さず、隣人を愛さず、自己中心に生きることでした。生まれながらの人間はすべて、自己中心の性質に支配されて生きていると聖書は言うのです。

しかし私たちは、イエス様を信じた時に、「罪の奴隷」から解放されるのです。つまり罪から「自由」になるのです。「奴隷」は、自分で自分を解放することも、「自由」になることもできません。誰か他の主人が代価を払って、自分を買って取ってくれなければ、解放

されることも、「自由」になることもできないのです。

イエス様は、イエス様を信じる私たちのために、十字架で御自身のいのちを代価として払い、私たちを「罪の奴隷」から解放し、「自由」にしてくださったのです。そして神様を主人とする「神様の奴隷」、また神様を父とする「神様の子ども」としてくださったのです。イエス様を信じる時、私たちは「罪の奴隷」から「神様の奴隷」また「神様の子ども」とされます。そして私たちの主人は、「罪」から「神様」となるのです。さらに私たちの人生は、「罪に従う人生」から、「神様に従う人生」となるのです。

「罪に対して死ぬ」というのは、罪を完全に犯さなくなるということではありません。それは、「罪の奴隷」から解放されて、「神様の奴隷」「神様の子ども」とされたということです。つまり「身分」や「所属」が変わったということです。

例えば、私たちが長年勤めた職場を辞め、転職したとします。新しい職場には、昔の職場とは違う方針があり、ルールがあります。しかし私たちは、新しい職場の方針やルールにしばらく適用できずに、長年勤めた昔の職場の方針やルールが体に染みついて、混乱したりミスをしたりします。しかし次第に、新しい職場の方針やルールに適用し、職場に貢献できるようになります。

私たちも、イエス様を信じてクリスチャンになった時に、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」「神様の子ども」とされます。しかし「神様の奴隷」「神様の子ども」とされても、昔の「罪の奴隷」としての生き方が体に染みついている、なかなか「神様の奴隷」「神様の子ども」としての生き方に適用できないということが起こります。「身分」や「所属」が変わったにも関わらず、体に染みついた罪の性質が残っているのです。ですから私たちは、繰り返し繰り返し、「あなたはもう罪の奴隷ではないんだよ」「神様の奴隷だよ」「神様に愛されている子どもだよ」というメッセージを聞かなければならないのです。そうして新しい「身分」や「所属」にふさわしい性質を身に着けていくのです。

3. 神に献げる人生

私たちは、イエス様を信じた時、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」「神様の子ども」とされました。9-11 節でパウロはこう言っています。「**私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです。なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きているのです。同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあって、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。**」

イエス様が十字架で死なれ、復活されたのは一度だけです。もう一度十字架で死なれることはあり得ません。私たちも「罪に対して死ぬ」のは、一度だけです。つまり「罪の奴隷」から解放されるのは、一度だけです。私たちはもう後戻りできないのです。私たちは、決定的に「神様の奴隷」「神様の子ども」とされたのです。もう二度と「罪の奴隷」となることはできないのです。14 節に、「**罪があなたがたを支配することはないからです**」と

ある通りです。

では、私たちは「神様の奴隷」「神様の子ども」として、どのように生きればよいのでしょうか。12-13節でパウロはこう言っています。「**ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神に献げ、また、あなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい。**」

イエス様を信じてクリスチャンになった人は、もはや「罪の奴隷」ではなく、「神様の奴隷」「神様の子ども」とされています。決定的に「身分」や「所属」が代わったのです。しかし私たちは、「神様の奴隷」「神様の子ども」でありながら、「罪の奴隷」のように振舞うことはできます。「罪の奴隷」には、二度と戻れませんが、「罪の奴隷」のように生きることはできます。つまりクリスチャンでありながら、神様も愛さず、隣人も愛さず、自己中心に、自分の好きなこと、やりたいことをして生きることはできます。

しかしパウロは、「罪に支配させて、からだの欲望に従ってはいけない」と言います。私たちはもはや「罪の奴隷」ではないのだから、「罪の奴隷」のように生きてはいけないと言うのです。むしろ「神様の奴隷」「神様の子ども」なのだから、「神様の奴隷」らしく、「神様の子ども」らしく、神様に従い、神様に自分自身を献げて生きなさいと言うのです。

おわりに

イエス様を信じて洗礼を受けた私たちクリスチャンは、イエス様と一つに結ばれ、イエス様と共に死に、イエス様と共に新しいいのちによみがえりました。それは、「罪の奴隷」から「神様の奴隷」「神様の子ども」とされたことを意味します。私たちが従うべき主人は、「罪」ではなく、「神様」です。私たちが今生かされている新しいいのちとは、「永遠のいのち」のことであり、このいのちは「罪の奴隷」として生きるいのちではなく、「神様の奴隷」「神様の子ども」として生きるいのちです。

私たちがイエス様から与えられた「自由」とは、「罪の奴隷」状態から「自由」にされたということです。決してすべての罪が赦されたから、自分のやりたいこと、好きなことをして生きるということではありません。私たちは決して「奴隷」でなくなったわけではありません。私たちは「罪の奴隷」から「神様の奴隷」とされたのです。私たちの従うべき主人が変わったのです。私たちがイエス様から与えられた「自由」は、「神様の奴隷」「神様の子ども」として生きる「自由」なのです。神様の愛の中で、喜びをもって神様に従い、神様に自分自身を献げていく「自由」なのです。

天におられる私たちの主人であり、父である神様。

生まれながらにして自己中心に生き、「罪の奴隷」として生きてきた私たちを、御子イエス様の尊いいのちを代価としてささげ、「あなたの奴隷」「あなたの子ども」としてくだ

さったことを感謝します。しかし私たちには、古い性質、「罪の奴隷」の性質が残っているため、「罪の奴隷」に逆戻りしようとする力が働きます。しかし私たちは確かに、ただ一度、決定的に「神様の奴隷」「神様の子ども」とされました。私たちの従うべき主人は、「罪」からあなたへと変わりました。どうか私たちが「あなたの奴隷」「あなたのしもべ」として、ふさわしく生きることができますように。「罪」の力に自分を委ねて、「自由」をはき違えて生きることがありませんように。

この祈りを私たちの贖い主イエス・キリストの御名によってお祈ります。アーメン。